囲を広く越えて大勢の人々が駆り出され、この大土木工事に携わったことを想像させる。

二　古代仏教と木山廃寺

仏教の伝来と広がり　大和朝廷に朝鮮半島の百済国から仏教が伝えられたのはふつう宣化三年（五三八）とされているが、百済の聖明王が朝廷に釈迦像・幡・経典などを贈ったことを指している。その後日本では仏教の受容をめぐって、大和朝廷の有力豪族の間ではそれを受け入れようとする奉仏派の蘇我氏と他国神としてあくまでそれを受け入れまいとする反仏派の物部氏・中臣氏との間で争いが繰り広げられている。しかし、用明二年（五八七）物部氏が滅ぼされたあと、崇峻元年（五八八）には蘇我氏によって日本最初の本格的な寺院である飛鳥寺（法興寺）が飛鳥の地に建立され始めた。さらに推古二年（五九四）に推古天皇の摂政であった聖徳太子から蘇我馬子に仏教興隆の詔が出されるに及んで、中央の豪族たちも競って寺院の建立を始めたと伝えており、仏教が近畿地方を中心に次第に広がりを見せ始めたことを物語っている。

- 推古三十二年（六二四）の僧・尼数…僧　八一六人、尼　五六九人
- 推古朝（五九三～六二八）の寺院数…七国に四六寺（大和～備中）

※　飛鳥時代の終わりには八〇寺近くになる

大化の改新といわれる大化元年（六四五）仏法興隆の詔が出されたあと、天武朝から持統朝に推移する間には国家の仏教政策として、官寺の建立・僧尼の統制などがすすめられていくが、天武十四年（六八五）に次のような詔が出されている。

「詔、諸国毎家、作仏舎、乃置仏像及経、以礼拝供養」

（詔したまはく、国ぐにに、家毎に、仏のおほとのを作りて、乃ち仏のみかた及び経を置きて、礼拝供養せよ）

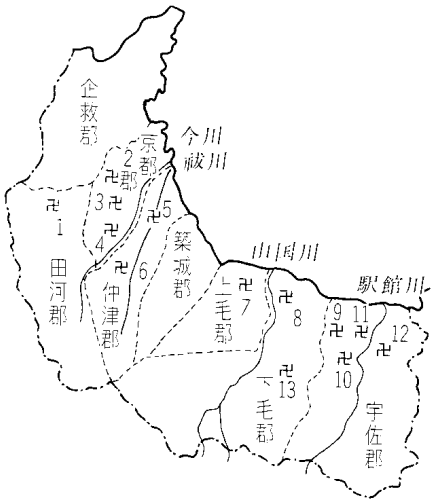
家毎という言葉が家宅説・寺院説で争われてはいるが、このようなことから仏教の地方への普及が推進されて全国各地に寺院の建立がすすめられるが、一方では次第に仏教が鎮護国家（国家の平安・隆平・安寧、五穀成熟、病気退散）のために利用されていくようになる。

豊前地方への仏教の伝播　仏教が伝来して一五〇年ほどたった七世紀の後半になって九州北東部の豊前地方にも堂や塔などを備えた寺院の建築が始められる。それは天武・持統朝においての国家による仏教政策と密接なかかわりを持っている。しかしこの地方への仏教の伝来については百済から仏教が伝えられる（仏教の公伝）前に、既に朝鮮半島からの渡来人によってもたらされ（仏教の私伝）、私宅に仏像を安置して礼拝していたという意見があり、草堂仏教という呼びかたがなされている。大宝二年（七〇二）の豊前国戸籍（正倉院文書）の残簡には多くの渡来系の人々の名前が見られることからすれば、公伝前の仏教の私的な伝来のあったことは十分に考えられるところである。

ところで豊前地方に白鳳時代から奈良時代にかけて建立されたと考えられている寺院遺跡は、現在までの調査では一三遺跡を数えるが、それらが既に廃絶してしまっていることから、廃寺と呼ばれている。（第3図参照）

木山廃寺　犀川町の古代寺院としては木山廃寺がある。木山集落の南側で、今川の支流である松坂川のつくった扇状地の低丘陵上に位置する。この廃寺の遺構は明治九年（一八七六）ごろの

第3図　豊前国の古代寺院分布図



1　天台寺跡　田川市鎮西町（旧田川郡）
2　椿市廃寺　行橋市福丸（旧京都郡）
3　菩提廃寺　京都郡勝山町菩提（旧京都郡）
4　木山廃寺　京都郡犀川町木山（旧京都郡）
5　豊前国分寺跡　京都郡豊津町国分（旧仲津郡）
6　上坂廃寺　京都郡豊津町上坂（旧仲津郡）
7　垂水廃寺　築上郡新吉富村垂水（旧上毛郡）
8　相原廃寺　中津市相原（旧下毛郡）
9　小倉池廃寺　宇佐市上元重（旧宇佐郡）
10　虚空蔵寺跡　宇佐市駅川町山本（旧宇佐郡）
11　法鏡寺跡　宇佐市法鏡寺（旧宇佐郡）
12　弥勒寺跡　宇佐市宇佐町（旧宇佐郡）
13　塔の能廃寺　下毛郡三光村（旧下毛郡）

土地改修工事によってほとんどが消滅したと考えられている。伝えられるところでは、その際、多量の瓦や塔の中心の礎石（心礎）が出土したといわれる。その中でも巨大な花崗岩の心礎は割られて、現在では木山集落内にある塞の神の石柱に転用されているが、その中央部には枘穴（ほぞあな）の一部が見られる（写真3参照）。

昭和四十九年（一九七四）には廃寺跡と推定される水田が再び圃場整備事業の対象地となったため、遺構確認のための事前調査が昭和四十九年十一月五日から翌年の一月九日まで行われた。

この調査では古代寺院としての伽藍（がらん）などの検出はできなかったものの、この廃寺の建立の年代を推定させる瓦をはじめ須恵器・土師器・硯・輪蔵の礎石などが発見され、大きな成果が得られている。

＜主な出土品について＞

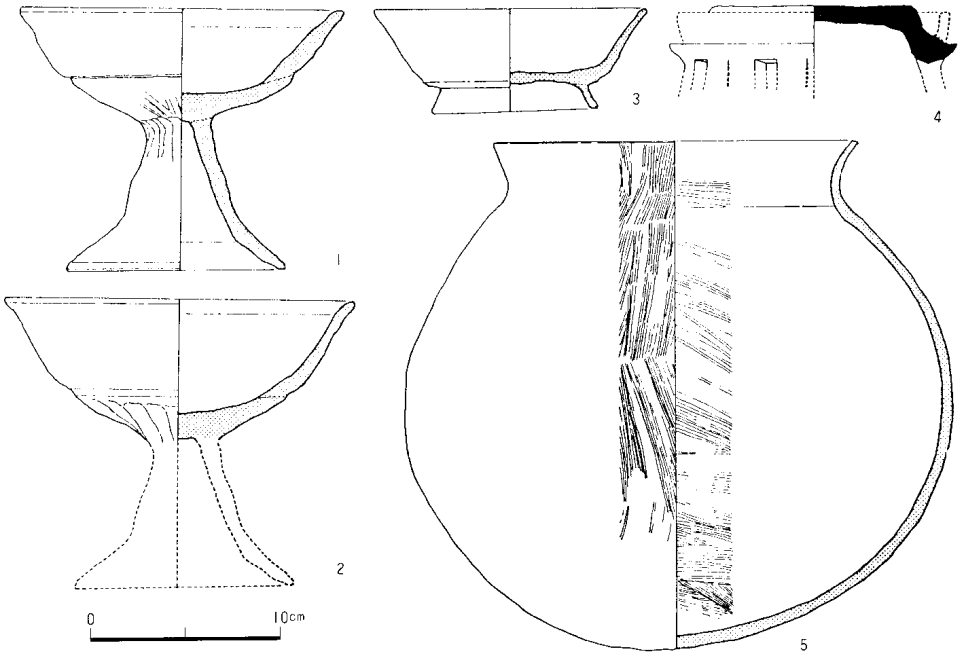
・軒丸瓦…単弁八弁丸瓦（百済系）、単弁十八弁丸瓦（大宰府系）
・軒平瓦…重弧文（じゅうこもん）平瓦、扁行唐草文（へんこうからくさもん）平瓦（大宰府系）
・土　器…須恵器杯、土師器高杯・甕
・　硯　…円面硯
・輪蔵礎石…廃寺跡（推定）の東端で発見（平安時代のころのものと推定、現地保存）

（「木山廃寺跡」犀川町教育委員会　一九七五より）（第4・5図参照）

※なお木山廃寺の瓦を焼成した窯跡としては、廃寺から北西約一キロの山麓部に福六（ふくろく）瓦窯跡がある。（第5図・写真4参照）

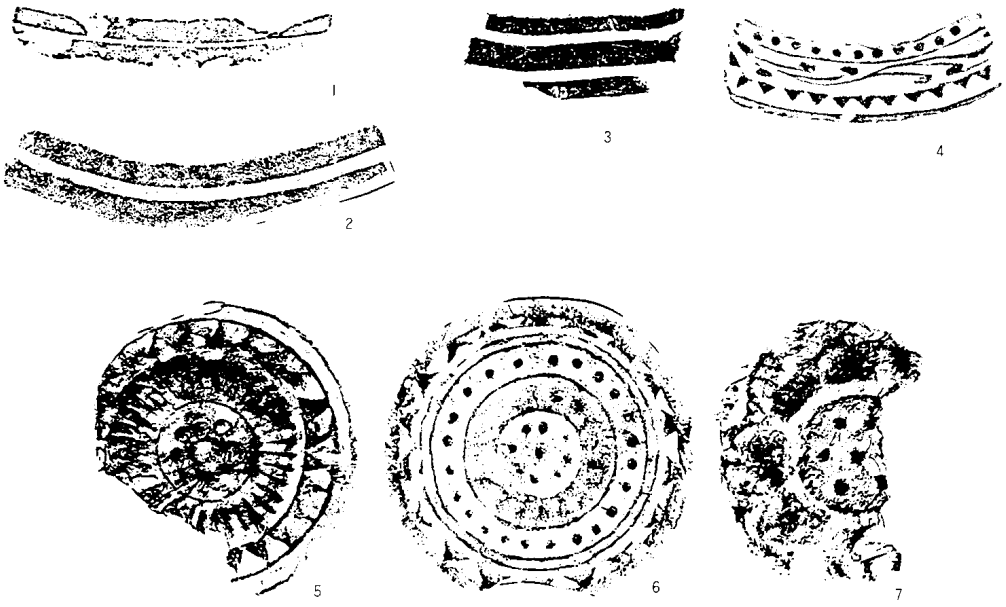
木山廃寺とほぼ同じころの古代寺院としては、近くに上坂廃寺や椿市廃寺があるが、以下簡単に紹介する。

第4図　木山廃寺跡出土土器実測図



1、2　高杯（土師器）3　高台付杯（須恵器）4　円面硯（須恵器）5　壺

第5図　福六瓦窯跡出土瓦拓影



1、2、3　重弧文軒平瓦　4　大宰府系軒平瓦　5、6　大宰府系軒丸瓦　7　百済系軒丸瓦

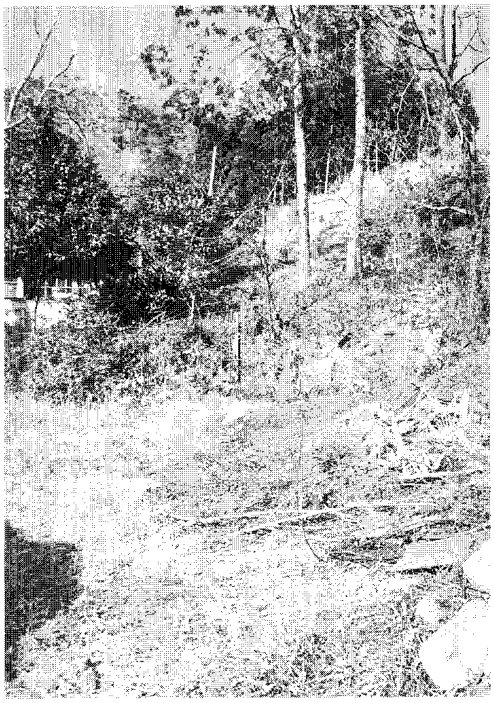
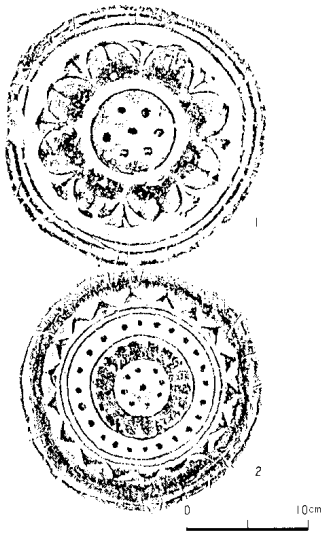


写真4　福六瓦窯跡（中央斜面）

写真3　木山廃寺の礎石（転用）

第6図　木山廃寺出土瓦拓影



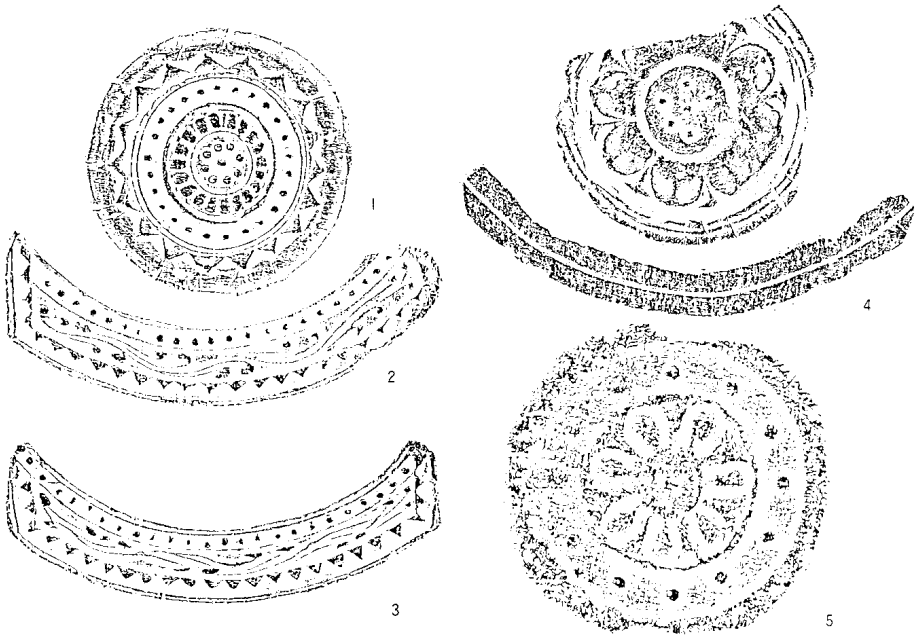
1　百済系軒丸瓦　2　大宰府系軒丸瓦

上坂廃寺（豊津町上坂）

祓川の左岸で、川と上坂集落との間に挟まれた水田下に廃寺は埋没する。現場には県指定を受けた塔の心礎があるが、直径二メートルを超える花崗岩の中心部には二重の枘穴がある。

昭和五十七年（一九八二）から五十八年にかけての圃場整備の事前調査で柱座をもつ礎石数個をはじめ多くの遺物が出土しているが、調査が十分ではなく、寺域や伽藍配置などは確認できなかった。主な出土遺物は、大宰府系軒丸瓦・軒平瓦、百済系軒丸瓦・軒平瓦、鴟尾片などがあるが、七世紀末の寺院と推定されている。廃絶の時期については不明である。（第7図参照）

第7図　上坂廃寺出土瓦拓影

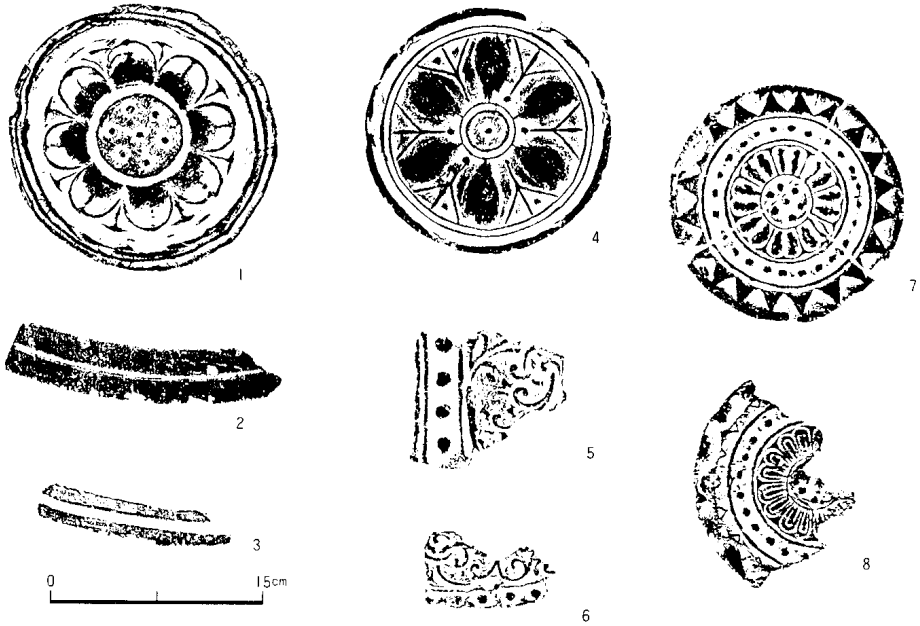


1　大宰府系軒丸瓦　2、3　大宰府系軒平瓦　4　百済系軒丸瓦・平瓦　5　軒丸瓦
（『豊津町誌』1985より）

椿市廃寺（行橋市福丸）

行橋市の北西部で、小波瀬川に沿って開けた狭長な平野の最奥部福丸の地に位置する。現在は天台宗の願光寺が建っているが、その庫裏を中心とした一帯の水田下に廃寺は埋没する。

第8図　椿市廃寺出土瓦（一部）拓影



1　百済系軒丸瓦　2、3　軒平瓦　4　高句麗系軒丸瓦　5、6　新羅系軒平瓦
7、8　大宰府系軒丸瓦
（「椿市廃寺」行橋市教育委員会　1980より）

昭和五十二年（一九七七）から三か年計画で行橋市教育委員会による重要遺跡確認調査が行われ、伽藍配置は南から北へ塔、金堂、講堂が直線状に並ぶ四天王寺形式であることが確認された。

平成四年（一九九二）には、椿市地区の圃場整備事業に先立って再び廃寺推定地の調査が行われ、講堂の基壇石組みや版築・回廊の柱穴群などが出土している。

これまでの主な出土遺跡は、塔の心礎をはじめ陶磁器類・瓦などがある。瓦は百済系軒丸瓦・軒平瓦、新羅系軒平瓦、高句麗系軒丸瓦、大宰府系軒丸瓦、平城宮跡出土の瓦に酷似する軒丸瓦、鴟尾片などがあり、土器では土師器・須恵器、磁器では龍泉窯系碗・同安窯系皿などがある。その他銅銭、銅鈴、螺髪、鞴羽口が出土している。（第8図参照）

報告書は「本廃寺の存続年代は、七世紀後半から九世紀にかけて存続したものとみて大過ないものと考える」としている。

（行橋市教育委員会「椿市廃寺」一九八〇より）

渡来人の活動

前出の豊前地方の初期古代寺院跡からは特に百済系瓦・新羅系瓦・高句麗系瓦など朝鮮半島三国の影響を受けた屋瓦が出土して注目される。大陸と一衣帯水にある北部九州と大陸との交流は古くから行われ、彼我の人々の往来はもちろんのこと我が国に渡来して住みつく人々も相当数に達したはずであるが、彼らの文化的に高い知識や技術はこの地方の古代寺院の建立の際にも十分に活用され生かされたに違いない。

豊前地方と渡来人の深い関係を示す史料としては正倉院文書の中の大宝二年（七〇二）の豊前国戸籍の残簡があるが、それは仲津郡丁里・上三毛郡塔里・上三毛郡加自久也里のものである。その中でも特徴的なことは、限られたこれらの戸籍の中で全人口に対する秦部・某勝を称する者が丁里で八五パーセント、塔里で九三パーセント、加自久也里で六六パーセントを占めていて、特に中央の渡来系氏族の代表的な秦氏との関係の深さが際立っていることである（第1表参照）。

秦氏は各地の勝（村主とも書く。スグリは「村の長」をさす韓の言葉であり、ここでは丁勝・黒田勝・高屋勝・古溝勝・狭度勝・大屋勝・塔勝・河辺勝・上屋勝などが見える）を通じて秦部（農業部民で渡来人ではない）を支配していたが、その出身地は新羅（辰韓の地）と考えられている。その秦氏が豊前国へ進出したのは磐井の乱（五二七）のあとのこの地方への屯倉設置とその管理に関与してのことであろうとされていて、農地の開発・養蚕業をはじめとして採銅から鋳鐘までかかわっていたと考えられている。産銅神である田河郡の香春神は新羅から香春郷に渡来したと伝えられているが、平野邦雄氏は「秦氏が産銅神である香春神の祭祀者となったのは、周防灘沿岸の京都平野へ進出したのとほぼ時を同じうして田河平野へも勢力を扶植した結果であろうし、両平野を通じて秦氏は香春の信仰を中心に族的な結合をなしたのではなかろうか」と述べている。

豊前国の戸籍の残簡から見ても、また豊前地方の古代寺院出土の新羅系瓦から見ても、秦氏が山国川より北の地域での開発に大いにかかわったことは間違いあるまい。

第1表　豊前国戸籍（大宝二年）

豊前における秦氏の勢力

地名	全戸口（A）	秦部（B）	……勝（C）	その他	奴婢	（A）に対する（B＋C）の割合
仲津郡丁里	四五七	二三〇	一六三	五一	一三	八五パーセント

上塔郡	一二九	六三	五七	九	〇	九三ヘクタール
三毛郡						
上三毛郡	九七	三六	二八	二一	一二	六六ヘクタール
加自久也里						

（箭内健次編「北・九州―縄文より明治維新まで」吉川弘文館　一九六八より）

三　豊前国の成立

豊国から豊前国へ

豊国の名は『日本書紀』などに散見され、次のように登場する。

・景行天皇十二年七月から始まる熊襲平定や賊徒征伐に際して
「天皇、遂に筑紫に幸して、豐前國の長峽縣に到りて行宮を興てて居します。故、其の處を號けて京と曰ふ」
・継体天皇二十一年（五二七）六月に新羅討伐に際して、筑紫国造磐井が反逆を企て
「磐井、火・豐、二つの國に掩ひ據りて、使修職らず」
・安閑天皇二年（五三五）五月、九州から関東にかけて屯倉を置いたとき
「…豐國の勝碕屯倉、桑原屯倉、肝等屯倉…を置く」
・宣化天皇元年（五三六）五月、非常に備えて、穀を那津の口に聚めることに関して
「…其の筑紫・肥・豐、三つの國の屯倉、散れて懸隔に在り…」
・また『豊後風土記』には
昔、景行天皇が豊国直らが祖、菟名手に重ねて姓を賜いて治めさせ、その国名も「天の瑞物、地の豐草」の故に豊国と称えさせた

このように『豊後風土記』には豊前国の国名の由来が述べられ、『日本書紀』には豊前国・豊国・豊とこの地方の呼び名が登場するが、いわゆるこれらは大化の改新の前、国造たちの治めていた国をこのように呼んだものである。そして大化の改新後の天智九年（六七〇）までは九州はまとめて筑紫国と呼ばれていた。九州古代の各国々の名が史料に初めて現れるのはまちまちであるが、薩摩・大隅国を除いた七国の成立は戸籍を造る年（造籍年）から考えて、持統九年（六九五）と推定されている。もちろん豊前国の成立もその年であり、豊国も筑紫国・肥国と同じく山河・地形から前・後に分けられて豊前国が誕生したことになる。

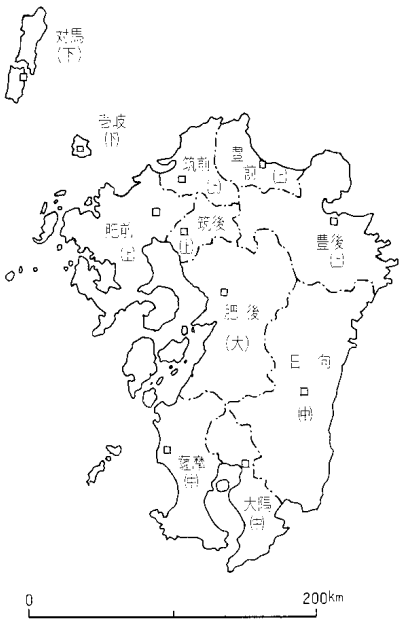
そして律令時代の全国の国々は、大国・上国・中国・下国の四等級に分けられたが、豊前国は上国として位置づけられた。（第9図参照）

四　豊前国府と郷土

国府の設置

大化二年（六四六）、孝徳天皇の改新の詔から始まって国・郡（評）・里という地方行政組織が確立していくな

第9図　西海道国府の分布



□　国府所在地